

高齢化が進む中山間地域におけるまちづくり

—「地域社会作りに貢献する社会福祉士の養成」の視点から—

Community planning in hilly and mountainous areas where aging progresses

堀川 涼子*¹

Ryoko HORIKAWA

1. はじめに

我が国においては、高齢化が進展する中、認知症の高齢者や医療ニーズの高い者が増加するなど、国民の福祉・介護ニーズはより多様化・高度化しており、これらのニーズに的確に対応できる質の高い人材を安定的に確保していくことが喫緊の課題となっている。

これらに対応するため、平成19年「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正とともに、社会福祉士・介護福祉士養成課程における教育カリキュラム等についても教育時間数の充実を図るなどの見直しが行われ、一層資質の高い社会福祉士・介護福祉士を養成していく環境が整いつつある。^[1]

こうした中、本学 社会福祉学科の「教育目的・目標」では、「少子・高齢化が急速に進むわが国において、安全・安心に暮らすことのできるまちづくりが強く求められ…（中略）…そのような社会的要請に応え、誰もが住み慣れた町や地域でのいきいきとした生活を実現するために諸課題の解決を目指し、地域社会づくりに貢献する社会福祉士の養成（後略）」と掲げている。そして、上記のような人材養成の目的を達成するために、次の教育目標を掲げている。

*福祉の理念、専門的知識と技術、加えてまちや地域づくりの知識を養う。特に地域福祉の充実のため、生活援助の提案・実践力を養う。（中略）

*社会福祉士として社会に貢献できるよう、地域社会や暮らしに対する強い関心や問題意識、目的意識、柔軟な思考力そして何よりも豊かな人間性の育成に努める。

これらの目標達成のための一つの方法として、専任教員の有志が二年次の学生を対象に「自主ゼミ」を開講している。これは、大学のカリキュラム外でのゼミであり、学生の自主性と社会福祉現場での実践力を養うことを目的に教員が独自に開講しているものである。この自主ゼミ活動から大学と地域と行政・地域包括支援センター・社会福祉協議会が連携をして、地域づくりを行い、生活課題を解決するため仕組みを作る「ものみりよくプロジェクト」が発足した。そこで、本研究では、高齢化が進む中山間地域における現状と課題を調査により明らかにし、地域住民・行政・社会福祉協議会及び大学・学生が連携して、地域の良さや特色を活かした「年代を超えてすべての住民が住み慣れた地域で安心して暮らし続けていくことができるための取り組みを行う。そして具体的な取り組みを通して、その方法から課題を明らかにしていくことを目的とする。本論文は、その第二報として、第一報「事前調査の結果」に至るまでの過程と現在の取り組みについて「地域社会作りに貢献する社会福祉士の養成」の視点からまとめる。

2. 自主ゼミの経緯

2010年6月に福祉のまちづくり学科¹⁾ 2年次の学生に向けて、小坂田・堀川連名で、「実践を伴う地域福祉の理論と社会福祉調査等の手法を学ぶ」ことを目的とした「自主ゼミ」の開講を伝え、ゼミ生を呼びかけた。希望者との面談を行い、計8名の学生がゼミ生として参加することとなった。

*¹ 美作大学 生活科学部 社会福祉学科 准教授 Assoc.Prof., Dept. of Social Welfare, Mimasaka Univ

「高齢化が進む中山間地域のまちづくり」をテーマに、週1回のゼミの中で、わが国の高齢化の状況、高齢者の生活課題等を統計書や各種調査より調べ、さらに介護保険制度をはじめとする福祉制度について調べ、発表しながら学んでいった。

夏休みには2泊3日の合宿を行い、地域福祉の理論と社会福祉調査の方法について学び、また、津山市の社会福祉協議会・地域包括支援センター職員に同行し、独居高齢者宅の訪問や限界集落の視察を行った。

10月以降は、「実践的地域包括ケアシステム²⁾」についての文献を読み進めた。同時に、津山市の地域包括ケア会議³⁾に参加し、津山市内の一人暮らし高齢者の実状について発表をし、「実践的地域包括ケアシステム」の考え方をもとに中山間地域で協働したまちづくりを行いたいという学生の思いを伝えた。

津山市地域包括ケア会議の中で話し合った結果、市内で過疎高齢化が進み、かつ地域包括支援センターや社会福祉協議会の関わりがまだ深くない地区として、「加茂物見地区」が選定され、学生の取り組み第一弾として、「生活調査」を行うこととなった。

この「生活調査」については、「美作大学紀要 第57号 拙著『高齢化が進む中山間地域におけるまちづくり 第1報』」を参照されたい。

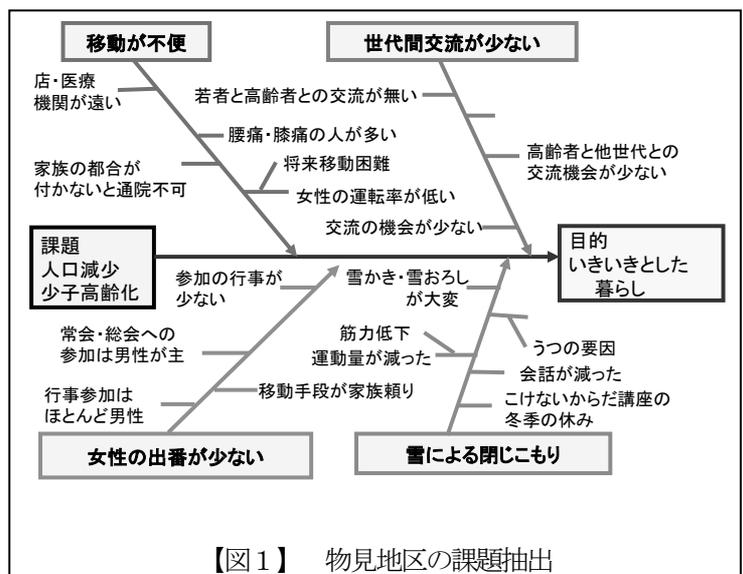
3. 津山市物見地区の概要

本研究の対象地区である岡山県津山市加茂物見地区は、鳥取県との県境にある中山間地域⁴⁾で、人口143人・55戸・高齢化率46.8%(2011年1月1日現在 津山市統計書より)の過疎・高齢地域である。15歳未満の年少人口は10人(7.0%)と少なく、15歳～64歳が66人(46.2%)、65歳以上が67人(46.8%)である。物見地区は「奥土居」「北土居」「古屋」の3つの字で構成されている。この地区は、旧加茂町役場から10.5km、現在の津山市役所から約30kmの距離にある。市街地から離れた物見地区は、商店の閉店、公共交通機関の縮小など生活に関わる多くの課題を抱えている。さらに、冬場は積雪により、多くの高齢者が生活に問題を抱えることになる。加茂町は2005年の市町村合併により津山市に吸収合併され、現津山市の総合計画や高齢者福祉・介護保険事業計画、さらには防災計画等を見ても、旧加茂町の中でも山間部に位置する物見地区の現状を踏まえた内容になっているとはいえない。そこで物見地区ならではの特徴を踏まえたまちづくりが必要といえる。たとえどんなに過疎・高齢化が進んだ地域であ

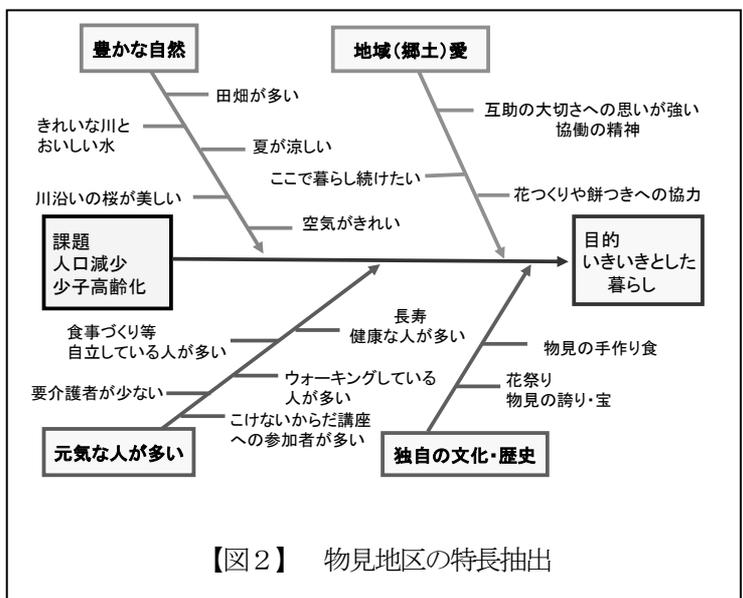
ろうとも、病気や重い障害があろうとも、住み慣れた地域でいきいきとした生活を継続することが望まれている。そのためには、住民が主体となり、行政をはじめ関係機関が連携した、「共助力」と「公助力」が協働した新たな取り組みが求められているのである。

4. 「ものみりよくプロジェクト」発足までの過程

2011年4月に行った生活調査の結果は、学生がアンケートをまとめ、大学、津山市地域包括支援センター、津山市社会福祉協議会とともに分析を行い、物見地区の生活課題と同時に物見地区の特長の抽出をフィッシュボーンにより行った。【図1、2】



【図1】 物見地区の課題抽出

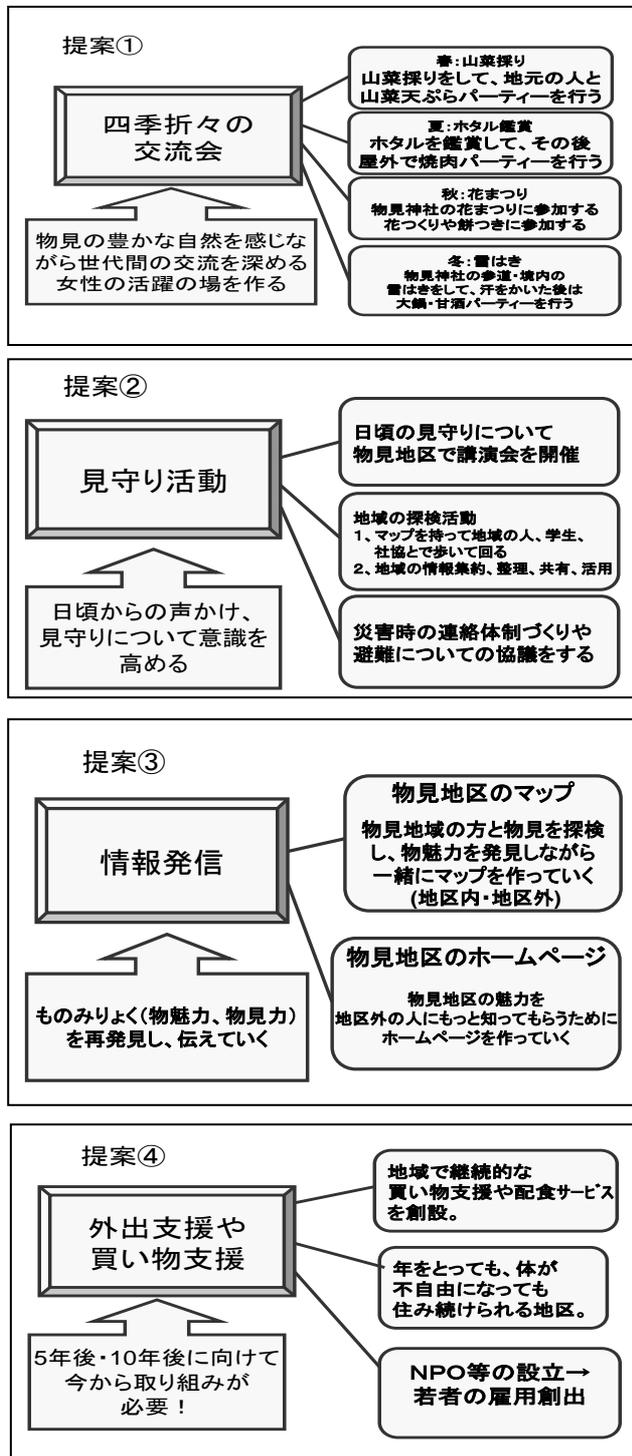


【図2】 物見地区の特長抽出

上記のように、生活課題としては①移動が不便 ②世代間交流が少ない ③女性の出番が少ない ④雪による閉じこもりがあげられた。また、特長としては、①豊かな自然 ②地域（郷土）愛 ③元気な人(高齢者)が多い ④独自の文化・歴史(特に、岡山県指定重要無形民俗文化財「花まつり⁷⁾」)があげられた。

2011年12月、この分析を基に今後の取り組み案を物見地区役員会で提案し、意見を交換した。

以下が、役員会を経てまとめた4つの提案である。



2011年4月 物見地区の町内会総会において、地域住民を対象に生活調査の結果と上記の4つの提案を行い、受け入れられた。

これにより、町内会の総意により物見地区の「いきいきとした暮らしを実現させるためのまちづくり」への取り組みが行われることとなった。

これまで、物見地区では町内の役員会を中心に行事や活動が計画され、決定されていた。しかし、既存の役員会だけでなく、物見地区で活躍の場が少ない女性や地区内の保健・福祉団体の世話役等も加え、さらに大学と地域と行政・地域包括支援センター・社会福祉協議会が構成員となり、連携をして地域づくりを行い、生活課題を解決するため仕組みを作る「ものみりよくプロジェクト」を発足させた。この実行委員会は解決に向けて協議し、主体的に行動する機能を有している。

「これからも物見に住み続けたい」という多くの高齢者の思いをかなえるために、「お互いに助け合う活動」「声かけ活動」「見守り・安否確認」などの活動が必要であると、年代を問わず多くの人がアンケートに答えている。特に若者の多くからこうした意見が聞かれたことは、注目すべきことといえる。さまざまなイベント等を行って、盛り上がるというだけでなく、

- * 地域の行事等に参加できない人が参加できるようにする。
- * 年代を超えた、みんなが参加する地域の交流の場にする。
- * 住民同士のふれあいのきっかけづくりにする。

ということを目指し、その後の継続したつながりになるよう、「ふれあい」から「支え合い」へとめざす。

これからの物見地区の地域づくりを考える時、こうした地域づくりの基盤として、まずは地域の様々な福祉課題をみんなで考えていく場づくりが必要とされる。すなわち地区社協の組織化であり、そのための福祉教育活動である。この取り組みを通して、実践的地域包括ケアシステムの最も基礎となる住民意識を創造していくこととなる。

5. 考察～地域社会作りに貢献する社会福祉士の養成

地域住民と共に地域づくりを行っていくために「自主ゼミ」活動において意識をしていたことは、地域に入って地域住民や地域の資源、雰囲気を知り、また一方通行の関わりだけではなく、住民に学生の存在を知ってもらうことである。つまり「顔が見える関係づくり」を形成することである。「アンケートを通して見えてきた地域の現状を実際に見たり、感じたりする」、「アンケート

だけでは分からない部分を地域の活動に参加し、日常の会話の中から理解を深める」ということを心がけてきた。

実際に学生関わった活動として、2011年4月の町内会総会での末に始まった津山市介護予防事業「こけないから講座⁸⁾」にサポーターとして参加、同年10月に花まつりの準備(花つくり、餅作り)への参加、花まつり当日に参加、などがある。このように新たな取り組みが始まる前から、既存の地区行事に参加することで、物見地区を歩いていると、住民から声をかけてもらえる関係、行事に参加すると、温かく迎え入れてもらえる関係を築きつつある。ただし、当初関わってきた学生たちは4年生となり、卒業を控えている。学生の卒業によって、取り組みが途切れないように、次の世代へ引き継ぐことが必要となる。現在の「自主ゼミ」では、4年生が「物見地区」、3年生が「津山市城東地区⁹⁾」に関わっている。そこで、「物見地区」に関しては、今年2012年度に募集をした現在の2年生が引き継ぐこととし、一緒に活動を始めている。

学生にとって生活調査をして終わりという一方的な短期的な関わりだけでなく、継続的に、日常的に地域住民と関わることで、調査だけでは見えてこない住民同士の関係性や生活課題、地域の魅力などを知ることができた。単に「知る＝知識を得る」のみならず、肌で感じ、心で感じ、より深く体感することができた。

学生たちは、「地域の役員から『10年後の将来人口を見てここまで高齢化が進んでいるとは思わなかった、なんとかしなければ』という声が上がっていた。住民自身が地域の現状を知ることの大切さを感じた」「実際にアンケートを行って見えてきたことを町内会総会で調査結果の公表し、取り組みの提案を行ったとき、反応がとても大きかった。調査結果を住民に返していく必要性を強く感じた」「私たち学生から見た地区の魅力を上げることで、地域住民自身がその魅力に改めて気づいたと言われたことが嬉しかった」と述べている。

「学生だからできること」を意識して「地域社会作りに貢献する」実感を、ゼミ生達が少しずつ持っていると感じている。

6. 今後の展望～始動！ものみりよくプロジェクト

4月の総会以降、ものみりよくプロジェクト実行員会が開かれ、生活調査から見えてきた課題と地区の特長を基に、取り組みの選定を行った。まずは7月に、町内会総会に出席していない住民とともに「支え合い意識」の向上が図れるよう、小坂田による「福

祉講演会『いきいきとした暮らしづくりを目指して』を行った。講演だけで終わらず、その後お弁当を食べながら住民同士、社協や包括職員と住民と、そして学生とも、交流を図った。また8月には津山市社会福祉協議会職員を招いて、実行委員メンバーが「要援護者福祉マップ(=支え合いマップ)」作りの講習を受けた。今後はこの「物見支え合いマップ」を各字分かれて、より身近な地域ごとに行っていくことが決まっている。

学生からも、「イベントに参加できない、参加しながらいない方へ個別に声かけ、送迎等を行い、一人でも多くの住民が交流できるきっかけ作りをする。」「見守り活動のためのマップ作りや地区探検を住民と一緒にやる。」「物見地区の魅力をインターネット等で情報発信

する。」「5年度、10年後の物見で活躍できるNPO創設も視野に入れて、先進事例を集め、住民に広く知らせる」など、「学生だからできる取り組み」を考えている。

学生たちは、「実際に専門職(特に社会福祉士)が地域に関わる姿を見て、自分の将来像として思い描くことができた。」「大学で学んだ知識や技術を実践することができた、そのため大学で学ぶ意味も再確認できた。」「地域住民、専門職、学生が同じ方向で活動することの大切さがわかった」「連携の難しさと必要性がわかった」と感想を述べている。大学内だけでは学べない「実践力」を自主ゼミ活動を通して学生は身につけてきていると感じる。

「福祉の理念、専門的知識と技術、加えてまちや地域づくりの知識を養う。特に地域福祉の充実のため、生活援助の提案・実践力を養う。社会福祉士として社会に貢献できるよう、地域社会や暮らしに対する強い関心や問題意識、目的意識、柔軟な思考力そして何よりも豊かな人間性の育成に努める。」この教育目標の一端を「自主ゼミ」が担ってきているといえるのではないだろうか。

これまでの成果として、昨年末に雪が激しく降り、地区の中心部にある公会堂で「介護予防事業」の存続が危ぶまれた。そこで、2つのより身近な公会堂へグループメンバーを分け、世話人+学生の参加により、真冬の間も会を存続されることができた。2つに分けることで、それぞれの参加者数は半減してしまったが、そこに学生と一緒に入ることで、活気付き、参加高齢者の心が動き、体がより動いたのではないかとと思う。

今後も、この「ものみりよくプロジェクト」の取り組みを地域包括ケア会議等で発表し、討議をはかり、大学と行政と社会福祉協議会等とで活動の方向性を出し、学生も巻き込んで地域住民の主体的な取り組みを行っていく予定である。

《注》

1) 福祉のまちづくり学科

美作大学生活科学部社会福祉学科は、2011年に名称変更をして改組された学科であり、それ以前は「福祉のまちづくり学科」であった。このため、2010年に2年生だった学生の所属学科は「福祉のまちづくり学科」となる。

2) 実践的地域包括ケアシステム

小坂田によれば「ニーズの発見から支援、さらには地域づくりにいたるまでの取り組みを一貫的に進めていく仕組み」。現在国が提唱する「地域包括ケアシステム」との混同を避けるために「『実践的』地域包括ケアシステム」としている。

地域包括ケア研究会の報告書（2011年3月）による国の提唱する「地域包括ケアシステム」の定義は次のとおり。

「ニーズに応じた住宅が提供されることを基本とした上で、生活上の安全・安心・健康を確保するために、医療や介護のみならず、福祉サービスを含めた様々な生活支援サービスが日常生活の場（日常生活圏域）で適切に提供できるような地域での体制」

介護サービス基盤強化のための介護保険法等の一部を改正する法律（2011年6月15日成立）において、第5次介護保険事業計画策定に当たっては、「ニーズに応じた住宅が提供されることを基本とした上で、生活上の安全・安心健康を確保するために医療や介護予防のみならず福祉サービスを含めた様々な生活支援サービスが日常生活の場（日常生活圏域）で適切に提供できるような地域での体制」としている。

3) 地域包括ケア会議

「地域包括ケア会議」は、担当圏域を越えた市町村単位で取り組むべき課題を議論したり、市町村内の地域包括支援センター間の情報交換、連携を図る「場」として、市町村または直営の地域包括支援センターで、定期的に開催される会議。^[4]岡山県では、単なる連絡会としての機能を越え、その地域での高齢者のいきいきとした暮らしの継続に大きな役割と責任を持つものであり、「地域包括ケアシステム」を機能化させていくために不可欠な会議と位置づけている。^[5]現在、津山市では、3ヶ月に一度の「本会議」と毎月「事業部会」「事例検討部会」を開催している。

4) 中山間地域

中山間地域とは、「山間地及びその周辺の地域等地理的及び経済的条件に恵まれない地域」（岡山県中山間地域の振興に関する基本条例第2条）「山村振興法に規定する山村」「特定農山村地域における農林業等の活性化のための基盤整備の促進に関する法律に規定する特定農山村地域」「過疎地域自立促進特別措置法に規定する過疎地域」をいう。

5) 3つの壁

ニーズを眠らす原因として、「意識の壁」「情報の壁」「制度・サービスの壁」の3つの壁がある。

6) 2つの生活けんの保障

その人らしく生きていくための「生存権」をあらわす「生活権」と地域とつながりを持って生活をする「生活圏」の2つが保障されなければ「地域でのその人らしい暮らし」を作ることはできない。

7) 花まつり

物見神社の秋祭り、物見地区内の三地区（奥・北・古屋）それぞれが「花」を作り、奉納するお祭り。岡山県指定重要無形民俗文化財。

8) 「めざせ元気！こけないからだ講座」

津山市の介護予防事業。主に「筋力向上トレーニング」プログラムが行われ、口腔ケアや、栄養改善指導が間に行われている。二次予防対象者をメインとした「施設版」と一次予防対象者をメインとした、「地域版」があり、地域版は市内160箇所以上で地域住民主体で行われている。物見地区でも2011年4月から週1回公会堂に集まり、生活目標を立てて、体操を行っている。

9) 津山市城東地区

津山市橋本町から東新町までの地区を指す。なまこ壁や防火用の袖壁・卯建（うだつ）のある古い家が軒を連ねる旧出雲街道沿いの町並み保存地区。だんじりを展示する作州城東屋敷や、幕末の洋学者の旧宅、津山の代表的商家跡、城東むかし町家などの観光場所があるほか、城東灯籠祭り、津山城東むかしまつりなどのイベントも盛んな地域。一方で高齢化率30%を超える街中の過疎高齢化が進んだ地域でもある。

《引用・参考文献》

- [1] 厚生労働省社会・援護局福祉基盤課 報告書「社会福祉士および介護福祉士国家試験のあり方について～20回の実績を踏まえた検証と新カリキュラムへの対応～」2008年
- [2] 小坂田稔「地域包括ケアとは何か―「地域包括ケアシステム」の考えをもとに考える 住み慣れた地域でのいきいきとした暮らしづくりに向けて」『月刊作業療法ジャーナル』45巻6号、2011年、三輪書店
- [3] 小坂田稔「地域包括ケアシステムの意義とその構成」美作大学紀要 通巻55号、2010年
- [4] 厚生労働省『地域包括支援センター業務マニュアル(2006)』、3頁
- [5] 田村元彦「地方という物語―地域は社会がつくる」寄本勝美・小原隆治編『新しい公共と自治の現場』、2011年、コモンズ
- [6] 浜崎裕子『コミュニティケアの開拓』、2008年、雲母書房
- [7] 山崎亮『コミュニティデザイン』、2011年、学芸出版社
- [8] 川島ゆり子『地域を基盤としたソーシャルワークの展開』、2011年、ミネルヴァ書房
- [9] 地域包括支援センター岡山モデル事業検討委員会『地域包括支援センター岡山モデル』、岡山県保健福祉部長寿社会対策課、2005年